

MB&F M.A.D. Gallery（ジュネーブ）では、チェコの職人ズデニェク・ミエシチェクによる、19世紀の伝統的なデザインを取り入れたハンドメイドの「ペニー・ファージング」自転車を展示している。

ペニー・ファージングは、自転車の歴史を語る上で欠かせない存在であり、またそのデザインは見る者を魅了して止まない。登場した当時、足が地面に届かないほど巨大な車輪の上に人を乗せた乗り物が、実用的な移動の手段になり得ると考えられたなどとは、およそ想像しがたい。だがこの自転車は、少なくとも数年にわたって、実際にその役割を果たしたのである。

1870年代にペニー・ファージングが初めて現れた当時、鉄のフレームと木の車輪を使った「ボーンシェーカー」をはじめとする、それまでの自転車より優れていると考えられた。ペニー・ファージングは、巨大な前輪でスピードを出せるだけではなく、石畳の道の乗り心地を向上させたためだ。しかし、その人気は長くは続かなかった。1885年には、現代の自転車の原型となった「セーフティー型自転車」の商業生産が始まり、1893年になるとペニー・ファージング型自転車の生産は事実上終了している。

サイクリングが山高帽と片眼鏡、モーニングコートを身につけた男性たちのものだった 1880年代。それから1世紀を経て、当時はチェコスロバキア社会主義共和国と呼ばれていた場所で、ミエシチェクのペニー・ファージングの物語は始まった。プラハから200km離れた小都市キヨフに住む技術者ヨゼフ・ミエシチェクは、古ぼけたペニー・ファージングに出会い、人生を左右するようなひらめきを得たのだ。

1980年代の共産政権下では、個人の自由は極めて制限されていた。宗教は冷遇され、私有財産はほとんどなく、海外旅行も規制されていた時代だ。だがチェコスロバキアでは、スポーツは許可されており、積極的に推進されてすらいた。

当時のキヨフにはサイクリングクラブがあり、64名が名を連ねていたが、自転車は政府が配給した2台だけという状況だった。ヨゼフは、その古びたペニー・ファージングをクラブ3台目の自転車として使うことを思いつき、若者に昔のサイクリングスタイルを紹介するのもちょうどいい機会だと考えたのだ。そこで、ペニー・ファージングはヨゼフの手によって分解され、再び組み立てられた。だが、クラブの人数を考えれば、新しい自転車をたった1台導入したところで状況はさほど好転しない。結局、ヨゼフはもう1台を自身で製作することにした。そしてさらにもう1台が完成する頃には、ペニー・ファージングの製作は単なる趣味ではなく、情熱を傾ける対象となっていたのである。ヨゼフのその情熱は、やがて息子のズデニェクに受け継がれていった。

「これまで、ずっと自転車の製作だけをやってきたんだ」と、ミエシチェクの自転車工房の現オーナーでありクリエイティビティを牽引する、36歳になったズデニェクは語る。「学校に通っていた頃は、家でもう自転車を作っていたよ。幼い頃に父と始めたんだ。自転車に関するものを何でも集めた後、しばらくしてペニー・ファージングに集中するようになってね。父も私も仕事としてやるつもりはなかったよ、ただ自転車を復元したかっただけで。でも、友人たちがこの自転車に関心を持ったものだから、自分たちの自転車を次々と作っていったんだ。そうしたらそれが仕事になって、生活の一部になっていったんだよ。」

1989年にベルリンの壁が、そしてソ連圏全体で共産主義が崩壊すると、チェコスロバキアの人々は不安の中、徐々に私企業という概念に順応していかなければならなかった。当時、ズデニェク・ミエシチェクは交通関連の高校で鉄道技術者を目指していたが、ペニー・ファージングの製作を事業にしたいという父親の意思に触れたとき、専攻を機械に変えたという。溶接や旋盤、フライス盤の技術は、そこで学んだ。

ミエシチェク親子は当初、製作した自転車に人々が関心を持つかどうか、さらには自分たちが製作を続けられるかどうか自信が持てなかった。事業計画はなく、ぎりぎりの生活を強いられる

詳細についてはこちらまでお問い合わせください:

Juliette Duru (MB&F SA, Rue Verdaine 11, CH-1204 Genève, Suisse)

Eメール: jd@mbandf.com 電話: +41 22 508 10 36

MB&F

M.A.D.GALLERY

Mechanical Art Devices

ミエシチェクによる魅惑の「ペニー・ファージング」が M.A.D. Gallery（ジュネーブ）に登場

こともあった。自転車製作の全資金をヨゼフが、そして生活費はすべてズデニェクの母が自身の収入から支払う毎日だった。

「蓄えもローンも、製作場所もない状態ですべてが始まったんだ」と、ズデニェクは当時を振り返る。「ペニー・ファージングの製作は、ガレージでやっていたね。馬鹿なことをしているとみんなに笑われたこともあった。大変な時期だったけど、いろいろなことを学べたよ。」

現在のミエシチェク親子は、伝統的なデザインと製作による自分たちのペニー・ファージングが、世界中の自転車ファンから注目を浴びていることに喜びを感じている。その親子にも、この5年間でズデニェクが会社運営を父から引き継ぎ、キヨフの隣町のチェロジュニツェで工房に4人を雇い入れるといった変化があった。今やズデニェクは、金属旋盤工1名、研削工と研磨工2名、フライス工1名の助力を得て、材料調達から、難しい部品の溶接や研磨、最終的な組立まで、製造工程の全体を監督している。

自転車のあらゆる部品は、ズデニェクの極めて厳しい基準に合わせて手作業で製作されている。急ぐことは決してない。ズデニェクにとってミエシチェクの自転車とは、かつてのペニー・ファージングの設計原理をそのまま受け継ぐ存在であり、またそこに注がれる技術は、自転車に乗った勇敢な先駆者たち、そして初期のペニー・ファージングを生み出した、フランス人ウジェーヌ・マイヤーやイギリス人ジェームズ・スターレーのような人々に対するオマージュそのものなのだ。

「デザインや素材の面では、伝統を完全に踏襲している」とズデニェクは語った。「当時の高品質だった部品を最大限に取り入れながら、防塵ベアリングや軽量なリムのような現代の技術を少し組み合わせているんだ。」

ミエシチェクの自転車は手作業で製作されているため、年間の製造数はごく少ない。ミエシチェク親子がペニー・ファージングにかける情熱を事業にしてから、現在までの20年間に製造された数はわずか770台だ。

「自転車を製作しているとき、私の心にあるのは責任感だ」とズデニェクは説明する。「スタイルが良く、仕上げは完璧で、そしてもちろん機能性でも安全性でも非の打ち所がない。これはそういう自転車でなければならないからね。だから、自転車を納品するときになったら、まるで自分の子供が大人になって立ち立ちするような気持ちになるんだ。」

中には意外にも、毎日のようにこのペニー・ファージングに乗っているオーナーもいるという。それは1870年代を彷彿とさせる姿だろう。「そうなんだ、数人は本当に毎日乗っているんだ！」ズデニェクは語った。「でもたいていのオーナーは、ふだんはこの自転車を家に飾っておいて、乗りたい時に乗っているよ。」

1980年代のチェコスロバキア社会主義共和国の時代から、2013年のジュネーブにあるMB&F M.A.D. Galleryまで、長い道のりだった。だが、ミエシチェクのペニー・ファージング自転車は、それを乗り越えてきたのだ。その勇姿は、ここジュネーブで触れることができる。それほど情熱を生み出したペニー・ファージングの魅力とは。自らささやくその秘密に耳を傾けてはいかがだろうか。

詳細についてはこちらまでお問い合わせください:

Juliette Duru (MB&F SA, Rue Verdaine 11, CH-1204 Genève, Suisse)

Eメール: jd@mbandf.com 電話: +41 22 508 10 36

仕様

- ハンドルバー、ブレーキレバー、ハブ、ペダル、クランクは、すべてニッケルメッキ加工。
- ハンドルバーのグリップはチェリーウッド製。
- バックボーンはマンネスマン法による継目無鋼管、粉体塗装したフォークは 2.5mm の曲げ板金製。
- リムは粉体塗装。
- 牛革のサドルは、取り付け前に 2 週間慣らし済み。
- バックボーンの色には多彩な 89 色を用意。ペダルとタイヤのラバーは黒または赤。
- オプションのアクセサリとして、石油ランプのレプリカ（電池式）、ベル、ホーン、ハンドルバーに取り付ける荷物台、工具一式など。
- ペニー・ファージングの要と言える車輪は、71cm から 143cm まで（前輪）。最大サイズの車体に全オプションを取り付けても、重量は 14kg 未満。

「ペニー・ファージング」という名の由来

この不思議な名前は、イギリスの大きな 1 ペニー硬貨と、小さな 1/4 ペニー硬貨（ファージング）にちなんでいる。大きな前輪と小さな後輪が、まるでペニー硬貨とファージング硬貨を並べたように見えるところから、こう呼ばれた。

詳細についてはこちらまでお問い合わせください：

Juliette Duru（MB&F SA, Rue Verdaine 11, CH-1204 Genève, Suisse）

E メール: jd@mbandf.com 電話: +41 22 508 10 36